慢性疾患児の生活管理に携わる看護婦の意識調査

（分担研究：小児期の慢性疾患の長期的・総合的生活管理のあり方に関する研究）

石井哲夫
＊山根美江子、中塚博勝

要約：病院や長期療養施設における生活管理の実践の重要な担い手は看護婦である。今回　慢性疾患児の生活管理に携わる看護婦を対象に、子どもや親・職場環境としての病棟・看護婦としての自分に対する意識調査を行った。その結果から、決して十分とは言えない職場環境（設備・人員配置）のなかにあって子どもの生活管理に懸命に取り組んでいる姿を理解することが出来た。子どものためにも又看護婦のためにも、より良い生活環境としての病院・施設の整備に対する行政の配慮が必要である。

見出し語：生活管理、看護婦の意識、役割認知

［目的・対象及び方法］

前年度において慢性疾患児がどのような環境条件（人的・物的）のもとに生活しているのか、その実態について調査研究を行った。そこでは子どもの生活指導、教育、家庭や親との関わり、アフターケアーに関することなどさまざまな問題のあることが指摘された。今回それらの結果をふまえて、慢性疾患児の生活管理に携わっている看護婦を対象として、以下のような点に対する意識調査を実施した。

（１）日常かかわりを持っている子どもや親に対する意識傾向

（２）それぞれが身を置く環境（職場）に対する認知傾向

（３）子どもとかかわっている自分自身についての認知傾向

本調査の対象は、前回協力が得られた３１施設の中から任意に２７施設を選び、それぞれの施設において慢性疾患児の生活管理に携わっている看護婦のおよそ半数にあたる６５０名を対象に協力を依頼した。調査の方法は調査用紙を郵送あるいは直接持参し記入を依頼した。調査の期間は平成２年１２月１日よりおよそ１ケ月間である。

［調査の結果］

（１）回収率：調査依頼施設数　２７、回答施設数　２３、回答率８５．２％・調査用紙配布部数

日本社会事業大学
＊袖ケ浦のびろ学園

６５０部、回収部数３８１部、回収率５８．６％無効回答　０。　回答が得られた施設の内訳は、国立療養所１９、総合病院１、小児専門病院３であった。国立療養所のうち２施設（４７名）分は重心病棟に勤務する看護婦である。それ故結果の整理に当たってこれらの施設については別枠で処理し、特に比較検討せず参考までに掲載した。

（２）結果の処理方法：結果の整理は、それぞれの設問について得られた回答を、表現の違いはあってもニュアンスとして同じものを同一項目としてまとめ、さらにそれをいくつかの分類項目に従ってまとめた。同時にそれぞれの回答数を集計し一項目中の全回答数に対する百分率を算出する方法によった。

以下　調査項目にしたがって結果を述べていく。

１．長期にわたる入院生活は、子どもの心身の発達にさまざまな影響を与えるといわれています。このことについて日頃感じておられることをお聞かせください。

（１）子どもの入院生活の中で　「気になる子ども」とは、どのようなお子さんでしょうか。

これは日常の看護の中で子どもの生活行動のどのような面に注意を向けているかを、あきらかにしようとしたものである。表１のように子どもに対する認知傾向は、５つの項目にまとめることができる。それらは〈性格行動特性・自分を素直に出せない、意思表示が少なく自分のからに閉じこもっている、表情に乏しい、思いやりにかける、自己中心的〉〈親子関係・過保護、干渉、疎遠といった親から子への関わり方、親に対する愛着、愛情が薄い、親子関係が不自然といった子から親への関わり方〉〈仲間関係・集団に解け込めない孤立、いじめ〉〈看護婦との関係・大人の前で良い子ぶる、大人の目を気にする〉など、得られた回答の項目素数１０７と全調査項目中最も多く、関心の高さがうかがわれた。

表１〈気になる子ども〉

項　　目	全体	慢性疾患児	重心児
性格・行動特性に関わること	32.23%	36.1%	9.1%
人間関係に関すること	30.9	31.6	27.3
a．親子関係	〈16.7〉	〈15.4〉	〈25.0〉
b．仲間関係	〈8.8〉	〈10.0〉	〈1.4〉
c．看護婦・職員との関係	〈5.4〉	〈8.2〉	〈0.9〉
行動上の問題	13.9	15.0	7.3
病気・健康に関すること	11.9	6.6	44.1
発達上の問題に関すること	8.1	7.7	10.5
そ の 他	2.8	2.9	1.8

（無答率　3.7%）

（２）長期入院児の看護を進めていく上で、どのようなことに困難を感じておられますか。それぞれの年齢段階について感じていることをお書きください。

表２〈療育指導上の困難〉

段階 / 項目	幼児			小学生		
	全体	慢性疾患	重心	全体	慢性疾患	重心
発達に関すること	54.8%	57.7	15.0	5.9%	4.9	28.5
家庭・親との関わり	22.1	22.6	15.0	21.8	22.4	9.5
看護婦との関わり	23.4	20.1	70.0	50.1	49.6	61.9
療育指導に関すること	0	0	0	23.1	23.1	0
そ の 他	0	0	0	0.2	0.2	0

段階 / 項目	中高生		
	全体	慢性疾患	重心
発達に関すること	% 34.8	% 35.5	% 20.8
家庭・親との関係	0.9	0.9	0
看護婦との関わり	48.1	46.6	79.2
療育指導に関すること	16.1	16.9	0

（無答率　幼児23.1%　小学生18.3%　中高生12.2%）

結果のように、それぞれの段階に特徴的な傾向がみられる。すなわち幼児期では発達～母子分離と長期入院による発達への悪影響とその対応～に関することが問題であるが、小学生では看護婦が教育者・指導者的な役割をもって対応を求められる問題～仲間関係、学習、しつけ～が多くなってくる。中高生では思春期特有の問題～異性関係、進路指導、良い関係を作ることの困難さ～などが大きな問題として浮かび上がってくる。

（3）子どもが家庭を離れ長期にわたって入院生活を送ることについて様々な意見がありますあなたが感じておられる入院生活のプラス面マイナス面についてお聞かせ下さい。

表3〈長期入院のプラス・マイナス〉

長期入院のプラス面				長期入院のマイナス面			
項目	全体	慢性	重心	項目	全体	慢性	重心
生活のたてなおし	77.5	80.9	38.5	親子関係の問題	42.7	39.5	82.4
病気の管理	15.4	12.8	44.2	心理・発達面	38.7	38.8	9.8
親子関係の調整	4.9	3.9	15.3	生活・行動面	11.3	12.2	0
プラス面はない	2.2	2.3	0	看護婦との関係	4.8	4.5	7.8
				教育・学習面	4.5	4.9	0

（無答率　5.6%　2.4%）
（表中の数値は百分率）

長期入院がもたらす子どもへの影響は表3のようにプラスと評価されることが時間の経過と共にマイナスに変わっていくことが問題として指摘されている。

（4）思春期は心身の発達の上で不安定な時期であるといわれています。あなたはこうした子どもたちの看護を行うときどのようなことに配慮されていますか。

思春期への対応は、直接的な対応と間接的な対応とに分けられる。前者は意志の疎通をはかることを目指した関わりであり後者は人的・物的環境条件を整えること子どもに係わる周囲の状況に注意を払うことなどが上げられている

いずれにしてもその対応にかなり苦慮しているようすが理解できる。

表4〈思春期対応〉

項目	全体	慢性疾患	重心
直接的対応	% 84.4	84.2	86.5
a. コミニケーション	〈28.5〉	〈27.9〉	〈40.5〉
b. 接触態度	〈23.9〉	〈23.8〉	〈24.3〉
c. 指導方法	〈32.0〉	〈32.5〉	〈21.6〉
(1) ほめ方・しかり方	〈12.0〉	〈12.1〉	〈10.8〉
(2) 看護婦の対応	〈20.0〉	〈20.4〉	〈10.8〉
間接的対応	14.3	14.4	13.5
その他	1.3	1.3	0

（無答率　9.3%）

（5）入院生活のマイナス面をカバーするためにあなたの病院ではどのようなことが行われたらよいとお考えですか。

マイナス面をカバーする対策として第一に家庭親との関係を調整することである。また、入院生活を楽しく過ごせるように配慮する。子ども自身を育てる。心の安定を図るための関わり。生活の場にふさわしい環境を整えるなど、看護婦が子どもの生活管理に積極的に関わることなどがあげられる。

表5〈マイナス面のカバーのための対応〉

項　目	全体	慢性疾患	重心
家庭・親との関係調整	% 55.5	54.9	85.9
指導的対応	24.4	24.9	14.6
看護婦の対応	14.7	14.7	14.6
a. 子どもへの対	〈5.9〉	〈5.8〉	〈7.3〉
b. 環境整備	〈8.8〉	〈8.9〉	〈7.3〉
教育・学習指導	5.3	5.3	4.9

（無答率　10.3%）

（6）退院後の自宅療養やセルフケアーがよりよく行われるために入院中どのようなことに配慮される必要があるとお考えですか。

ここにみられるように、親や子どもに対して様々な関わりが持たれている。慢性疾患は長期にわたって病気との付き合いを余儀なくされるものであり、それを支えていくのは親や家族である。

表6〈セルフケアーのための指導〉

項　目	全体	慢性	重心
子どもに対する指導	% 53.9	55.4	32.4
a.病気に対して	〈39.1〉	〈40.2〉	〈22.1〉
b.生活指導	〈14.9〉	〈15.2〉	〈10.3〉
親に対する指導	33.5	32.4	50.0
a.病気に対して	〈32.4〉	〈31.4〉	〈47.1〉
b.家庭環境の改善	〈1.1〉	〈0.9〉	〈2.9〉
看護婦の対応	9.3	9.4	7.4
アフターケアーに向けて	2.6	2.6	0
その他	0.7	0	10.3

（無答率　15.9%）

しかし親と本人の努力だけでそれを継続していくことは困難であり、保健所、病院、学校親同士の連携や協力体制作りがのぞまれる。

2．長期入院している子どもにとって病院は生活の場であるといわれています。子どものための生活環境としてあなたの病院（病棟）をみるときどのようなことをお考えですか。

（1）子どもにとってよりよい生活環境としての病棟を考えるとき、あなたの病院（病棟）ではどのようなことが整えられたらよいと思われますか。

子どもの生活の場としての病棟を考えたとき、第一に生活しやすい構造にすること、指導上からはその効果を上げるための設備の改善を望む意見が多く見られる。また、職員配置では看護婦の増員を求める意見もさることながら、生活管理の重要な担い手である保母指導員の増配置に対する希望が非常に大きかった。

表7　〈生活環境の整備〉

生活環境				職員配置			
項　目	全体	慢性	重心	項　目	全体	慢性	重心
病棟全体の改善	38.8	38.2	48.6	医療・看護職	36.3	34.2	61.5
生活指導上の改善	60.3	61.3	43.2	保育・指導職	56.3	58.5	30.8
その他	0.9	0.5	8.2	配置の見直し	5.4	5.8	0
				その他	2.0	1.5	7.7

（数値は百分率）
（無答率 13.8%　10.3%）

（2）あなたの病院で子どもの生活に役立っていると思われるものにどのような設備がありますか。また、改善を要求すると思われる設備はどのようなものでしょうか。

（1）（2）を通して生活管理にあたるものが子どもの生活環境としての病院をどのようにみているかを理解しようとしたものである。

それぞれの結果にみるように、子どもの生活環境としてふさわしいといえる施設は少ない。

（3）長期入院児のための病院としてふさわしい立地条件（場所）とは、どのような所が適切と思われますか。

〈環境条件・54.8%・立地条件・5.7%・交

通条件・２５．３％・敷地面積・１３．３％・距離条件・０．９％〉結果を一言でまとめるならば、

表８　〈施設・設備〉

項　目	役立っている設備			改善したい設備		
	全体	慢性	重心	全体	慢性	重心
病院・病棟全体	24.9	19.8	60.0	55.9	54.7	71.9
生活指導に関わるもの	72.4	77.3	38.0	43.5	45.3	18.8
その他	2.7	2.9	2.0	0.6	0	9.3

（数値は百分率）（無答率　31.0%　25.2%）

自然環境に恵まれ、公害もなく、静かで、敷地も広く、公共施設、文化施設が近くにある、交通の便も良い、そうした条件を備えたところが理想的な立地条件ということになる。

３．長期入院している子どもにとって、親や家庭の果たす役割が大切であることはいうまでもありません。長期入院児を持つ親や家庭との関わりについて感じておられることをお聞かせください。

（１）子どもや親との関わりの中で、あなたはどのようなことを大切にされていますか。

親との関わりの中で意識されていることは、第一に相互理解を増すための工夫、第二はそれに関連して親と対するときのこちらの側の態度についての注意、第三には親と子どもの関わりに対する気遣いである。

表９〈親との関わりで大切にしていること〉

項　目	全体	慢性	重心
相互理解	66.7	69.4	44.7
接遇態度	16.4	16.8	12.8
子どもとの関わり	16.9	13.8	42.5

（無答率　14.1%）
（数値は百分率）

（２）面会や来信も少なく、親との関係が疎遠になりがちな子どもに対してどのような援助をされていますか。

親と子どもとの関係の維持、子どもに対する気持が薄れないようにするには日常どうしたらよいか。それに対する対策は、親への働きかけを積極的に行うこと、そして一方で子どもの心の安定を図るための働きかけをすることである。

表10　〈親子関係の疎遠に対する援助〉

項　目	全体	慢性	重心
家庭・親への働きかけ	% 52.8	53.4	45.9
子どもへの対応	46.1	45.9	48.6
その他	1.1	0.7	5.5

（無答率　18.3%）

（３）無理解・協力的でない親に対して関わりを持っていくことは難しいことですが、もし、あなたがこのような親を指導する立場に置かれたしたら、どのようにされるでしょうか。

これは（２）と関連して親の理解、協力が得られるようにするために、どのような努力をしたらよいか、自分をその立場において考えられることをとらえようとしたものである。結果のように相互理解が得られるように情報提供を多くし、接遇に対するきめ細かな配慮をすることがほとんどに共通した意見である。

４．慢性疾患のために長期入院している子どもにとってもっとも身近な存在である看護婦の果たす役割が大切であることは、いうまでもありません。つぎの事項についてお聞かせください。

（１）あなたが今担当している子どもたちのためにしてあげたいことを三つだけ上げるとしたら、どのようなことをお考えでしょうか。

これは素朴な質問であるが、それぞれの潜在的な意識を理解することができる。三つの願いに表わされた内容は、第一順位から第三順位まで同じ

表１１〈無理解・非協力的な親への対応〉

項　　目	全　体
相互理解に努める	98.5%
a.情報提供	(49.9)
b.接遇態度	(48.6)
その他	1.5

傾向を示し、子どもひとりひとりに十分な愛情をかけてあげたいという点に向けられていることは興味深いことである。

（２）あなたは日常の業務の中で、次のようなことにどれ位の時間をかけておられますか。最近の一週間についてその合計時間をお書き下さい。

表１２　〈三つの願い〉

順位／項目	第一順位			第二順位			第三順位		
	全体	慢性	重心	全体	慢性	重心	全体	慢性	重心
健康回復	10.4	10.9	6.8	12.1	11.0	20.7	9.8	10.3	5.8
親との関わり	4.1	4.1	4.5	3.6	3.7	3.4	7.7	7.3	11.7
生活環境の整備	10.1	10.5	6.8	21.9	22.0	20.7	21.4	20.0	35.3
関わりを多く	75.4	74.5	81.8	62.3	62.3	55.1	60.9	62.4	47.1
a.心の安定	67.5	65.6	11.9	48.9	49.1	48.3	39.6	39.6	35.3
b.生活場面	7.9	8.8	2.3	13.4	14.2	6.8	21.4	21.4	11.8

（数値は百分率）（無答率　13.8%）

こどもの日常生活のどの場面にどれ位の関わりが持てているか、おおよその傾向を把握しようとしたものである。看護業務はこれ以外に多くあるわけであり、また生活指導を担当する職員が配置されていれば当然役割分担がなされていることになる。しかし、他の項でもみられたように、そうした職員の配置は決して十分でなく看護婦に負うところが大である。ここにみるように十分な関わりが持てているとはいえない。

５．看護婦としてのあなた御自身についてお聞かせください。

（１）看護婦としてのあなたはこどもたちからどのように期待されていると思いますか。

表１３　〈関わりの時間〉

項目	０分	３０分	１時間	１～３時間	３～６時間	６時間
遊びの相手	７人	６８	４６	６４	２７	３０
話し相手	１	６３	６８	５６	３０	２５
自治活動	２３	３６	２２	８	３	１
学習指導	２２	５３	６８	３３	１２	７
身の回りの世話	０	３７	３９	４６	３１	８５
レクリエーション	２５	３０	２８	３３	１１	２

（無答率　28.1%）（数値は実数）

ここでは他者の認知を通して自分をどのように認知しているかをとらえようとしたものである。認知の内容は表のように、人格・人がらに関すること、援助者としての役割、教育者的役割についての認知という三つの項目に分けられる。

（２）子どもたちの看護という仕事を通して、あなたはどのようなことに喜びを感じておられますか。

喜びの体験は当然のことであるが、子どもの健康回復、心身の成長発達、子どもとの関わりのなかで心の触れ合いを感じること、信頼関係ができたとき、子どもらしい明るい笑顔に接するとき、などの実感を通して得られるものである。

（３）このような職場に働く看護婦として、特に必要な要件はどのようなことだとお考えでしょうか。

必要要件は表のように四つの特性に分類できる

〈人格・人がら〜寛容、寛大、根気強さ、愛情〉〈仕事・子どもに対する態度〜責任感、子どもを尊重する、子どもが好きである〉〈能力（知識・技術・経験）〜広い知識、向上心、専門性、判断力、観察力〉〈心身の健康と安定〜心身ともに健康、情緒の安定〉

表１５　〈子どもの期待に固体する認知〉

項　　目	全体	慢性	重心
援助者としての役割	% 65.5	66.4	55.6
人格・人がら	16.4	16.8	11.1
教育者・指導者的役割	3.1	3.4	0
その他	14.9	13.5	33.3
a. わからない	8.1	6.4	29.6
b.期待されていない	6.5	6.7	3.7
c.その他	0.3	0.4	0

（無答率　３１．０％）

（４）今の職場で、専門性を高めるための研究・研修の機会に恵まれていると思いますか。

〈恵まれている〜６７．５％・恵まれていない・３２．５％〉結果を見るかぎりでは肯定的な回答が多い。しかし回答の背景にあるものは複雑で、研修の機会の多少には施設差があること、恵まれていると感じるか否かは個人差があること。個人がどのような姿勢を持っているかによって受け取り方が異なる傾向がある。

表１６　〈喜びの体験〉

項　　目	全体	慢性	重心
健康回復・病状安定	% 46.1	47.5	33.9
子どもとの関わり	51.1	49.8	62.3
a.相互理解・信頼関係	〈21.3〉	〈21.9〉	〈16.9〉
b.日常のふれあい	〈29.8〉	〈27.9〉	〈45.4〉
親・家族との関わり	1.4	1.1	3.7
その他	1.4	1.6	0

（無答率　１９．１％）

（５）専門性を高めるために、今後どのような面について研修したいと思われますか。

研修内容の希望として、ここに示されたように子どもの理解と指導に関わる心理学に関連することへの関心が高い。長期入院児との関わりは、日常の生活をどのように展開していくか、そしてその中から派生してくるさまざまな問題をいかに対処したらよいかという、いわば生活の中の日常性ともいえるものが大きなウエイトを占め、そうした中でひとりひとりが悩んでいると考えるならばそれに応じてくれる可能性のありそうな面に関心が向けられるのはうなずけることである。

表１７　〈看護婦としての必要要件〉

項　　目	全体	慢性	重心
人格・人がらに関すること	% 33.0	33.2	21.9
仕事・子どもに対する態度	37.8	38.7	30.4
能力（知識・技術・経験）	18.9	18.7	20.3
心身の健康と安定	10.2	9.3	17.4
その他	0.1	0.1	0

（無答率　１４．３％）

［まとめ・考察］

病院や施設における生活管理は入院準備段階からアフターケアまでを含む親や子どもに対する総合的な援助の実践である。そして当然のことながら実践の重要な担い手は看護婦である。子どもの看護は、成人と異なりその対象である子どもひとりひとりが発達という課題を背負った存在であるという認識に立って援助していくことが求められる。より良い援助者としての看護婦を考えるときそれぞれがどのような意識を持って子どもの看護に当たっているかを知ることは、生活管理

表１８　〈研修希望分野〉

項　　目	全体	慢性	重心
心理学に関連すること	% 80.8	62.2	35.3
生活指導に関すること	9.4	9.8	0
看護に関すること	14.6	14.2	23.5
医学・医療に関すること	4.7	4.6	5.8
その他	10.5	9.2	35.3

（無答率　３４．７％）

のあり方を考察していく上で意義のあることである。

今回生活管理に携わるスタッフの一員としての看護婦を対象に意識調査を行った。それらは日常関わりを持っている子どもや親、職場環境としての病院、子どもに関わっている自分自身に対してどのような認知傾向を持っているかを明らかにすることであった。

1．長期入院の影響〜〜既に述べてきたようにさまざまな問題が指摘されている。確かにそれらは病気や入院期間の長短によるところもあるが、入院の時点で問題を抱えている子どもが多いことも事実である。病院としては新たな問題の発生予防と併せて、ひとりひとりの問題に対することを求められるという重荷を負わされているのである。

2．生活環境としての病院〜〜子どもにとって理想的な病院の条件は限り無くあろうが、それらが全て満たされることは困難である。実態としては職員一人一人の努力によってカバーされている部分の大きいことが十分に理解される。

3．親や家庭との関わり〜〜親との関わりは、これがという絶対的な対応法が無い。相互理解を目指して根気強い関わりを持っていくこと、子どもへの指導を通して自立を目指す、どちらも時間をかけた対応が必要である。

4．看護婦自身〜〜それぞれが子どものために不備な状況の中で真剣に取り組んでいる様子が理解できる。

生活管理の全てが看護婦にかかっているのではないが、以上の結果においても明らかなように、どの施設においてもほとんどを看護婦に依っていることも事実である。それはとりもなおさずその存在の大きさを意味するものであり、と同時に看護婦のあり方が子どもの生活管理の効果に影響を及ぼすといえよう。ここでは意識構造についての理論的な分析まで及ぶことはできなかったが当初の目的に対する資料は得ることができた。前回の調査研究の結果と合わせ、生活管理のあり方を求め研究を続けていきたい。

以　上

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:病院や長期療養施設における生活管理の実践の重要な担い手は看護婦である。今回、慢性疾患児の生活管理に携わる看護婦を対象に、子どもや親・職場環境としての病棟・看護婦としての自分に対する意識調査を行った。その結果から、決して十分とは言えない職場環境(設備・人員配置)のなかにあって子どもの生活管理に懸命に取り組んでいる姿を理解することが出来た。子どものためにも又看護婦のためにも、より良い生活環境としての病院・施設の整備に対する行政の配慮が必要である。